哲學研究　第百五十號

コーヘンに於ける根源と非有（承前）

由良哲次

四

以上に於て吾等は先づコーヘンの論理學の根本特質を語り、その根源が思惟を實在との Identitaet を終極に先立しつゝも、しかも、そはあらゆる發展の源泉たる意義を有する所より、根源そのものゝ an sich に於て具有する一の內在的なる要素を訊ね、次に根源は又純粹に活動的なるものとして特質づけらるゝ所より、その活動そのものが尙ほ如何なるかを分析的に考究して、それに於ける fuer sich なる內面的作用的要素を求めようとした。次に又根源は純粹に質的なるものでありつゝあらゆる現實の源泉であり基礎であるならば、かゝる質的なるものよりは如何にして現實構成に於ける量的なるものゝ生ずべきかを尋ねかゝる現實化、量化の原理としての Materie を究めんとした。最後にまた根源の根本的なる特質としての連續性が無限小實在性の系列に於て異別的なるものを分離し集繫し、無限系列を生產し個性的なるものを

創造するその基柢には一つの意志的なるものゝ根本作用のあるべきを指示しようとした。しかして私はかゝる根源に於て求めらるべき內在的要素を作用的要素、マテリイと意志とを、コーヘン自らの體系に於て求めてそれを彼れの非有概念に求めた。かゝる意味に於てコーヘンの根源と非有との關係を考察することこそ、この小論文の企圖する所であつた。しかして私はコーヘンに於ける非有の概念が明示的には如何なる性質を叙義されたるかを叙述した。吾等は以上の考究の上に、更により深く、より適確に根源と非有との關係を見究めなければならぬ。

既に吾等が考察したる所では、純粹思惟を最も根源的、具體的なる思惟とするコーヘンは、パルメニデスに於ける思惟と實在の Identitaet を基礎的なる指定として把持してゐる。Denken und Sein sind dasselbe. Es gibt kein anderes Seiendes, als das des Denkens, und kein Gedachtes noch Denkbares, denn das Seinde. (Cohen; Platos Ideenlehre und die Mathematik, 1878. S. 2) こは彼の初期の思想に於て明瞭なる言表をとつて以來、彼に一貫したる根本特質である。彼の純粹性は抽象的形式ではなく、具體的なる根源を意味し、常に生產し彫塑する根本作用を意味する限り、その思惟は異質的な、根源を異にする不純なる素料に對するものではなく、自らに於て純一に、根源的に一なるものである。思惟の働きが

常に具體的なる限り、この作用と內容との具體的相卽、作用が直ちに內容たることは、寧ろその根柢に思惟は直ちにその素料と、從つて又生產され統一さるゝ實在、對象と一たりとせらるゝことは自らなることである。『もしこの根源的なる同一を許さないならば、思惟は何等存在に關係することを得ず、思惟の要素といふも砂上に描かれたるものに過ぎない。實に同一性こそ思惟の特性である』。(L. 94)『吾等のエレアテイスムにては有に於てはその解決が思惟に於てその素地を含まざる如き問題を有しない』。(L. 588) コーヘンに於けるこの思惟と實在との Identitaet はたゞにこの二者の具體相卽を意味するに止らず、合一一致を意味し、終極にはその根柢に二者の Einheit 一態、唯一を意味するものである。その根源に於て唯一一態のものでないならば、そは眞にその發源に於て相卽一致することは出來ない。しかしてこの究極の一態はその終極の相に於ては自らに定止する一如でなければならぬ。動く發展に於ける相卽一致は究極に靜定の一態を極限として有せなければならぬ。私はコーヘンに於ける根源的な Identitaet は、その究極基礎に於て眞の in sich selbst identisch, in sich ruhend な一如を豫想するものなることを認めざるをえない。

しかし乍らこの終極基礎は又終極の根源として、あらゆる動的發展の源泉であり、

あらゆる存在の基礎である。しかしてこゝにこそ問題は潜む。如何にして究極に自ら同一一如なる極源が同時に又發展の源泉となり得るか。究極に自己同一にして自らに定止する一態は、そのまゝにて對立と分化從つて又發展の動きを有せざるものである。しかし乍らコーヘンの根源はたとひ同一であつても、そは靜止的なる自らの至完に憩ふものではなく、永遠の動態、無根の作用である。コーヘンの根源はただに形式と內容との相卽を意味するのみならず、自らに無限の可能を含む根源として具體性をもつ。コーヘンの根源は單なる純粹の一態ではなく、發展の無限可能を含む意味にての基礎性をもつ。しかし根源の有する性質の根據を私は彼の非有概念に於て求めた。根源が自らに究極の一如でありつゝしかも無限發展の源泉である所以は Identitaet としての根源そのものに永遠の發展を齎らし出す內面的要素としての非有を內在的に含むによる。

コーヘンの根源の概念がかゝる具體的なる意味を本具することは彼の依據した ἰδέα の概念の史的意味に見ても明かであらう。西洋哲學の誕生の最初に於てミレトス學派が宇宙の基底に摸索した ἀρχή はたとひ dinglich なものではないとしても、少なくも stofflich なもの、卽ち Urstoff であつたことは疑ひないであらう。その後この概

念は哲學的思索の發展とゝもに次第に純化されて愈可想的なるものとなつたといへ、尙ほ具體的彫塑的なる希臘の思惟法の特色にその基礎を供したものであつた。アリストテレスに至つては、すべてはそれによつて構成され、すべてはそれより出で來り、終極にそれの歸入する始原的なるものとなり、彼はこれを原理と解した。卽ちこの意味にては ἀρχή は主として具體無限の中の統一の原理を意味し、對立と限定の作用としてのアナクサゴラスの πέρας の意義をも含むものであつた。アリストテレス以後 ἀρχή は常に原理として解せらるゝとはいへ、しかもそは尙ほすべての樣態變化を通じて止まる Substratum でありツェラーの解する如くば、そは formale, begriffliche でありつゝ同時に又 Stoffliche, bewegende Ursache, Endursache であつた。(Vg. Aristotle; Metaphysica, Oxford. 983 b. Zeller; Die Philos. d. Griechen 2 Aufl, 1859. S. 246—7) しかしてコーヘンはこの ἀρχή を Anfang と譯すよりはむしろ Ursprung と譯すべきものとした。(L. 79) (彼は Platons Ideenlehre u. d. Mathem, にては尙これを Anfang と譯してゐる)コーヘンの論理學の第一基石たる根源の概念は實にかゝる歷史的意義を含む ἀρχή に外ならない。かくこの根源の概念の素性より見ても、又プラトーのイデアの超越乖離 χωρισμός に關するアリストテレス的解釋を極端に排するコーヘンの立場より見ても、如何に根源の概

念はそれ自身、具體的事象的實有的のものであるかを解しうるであらう。しかしてコーヘンの根源の概念が具體的なものであり、自ら具體的發展の源泉となるものであればあるだけ、その發展の內面的契機としての非有を自らに含むものでなければならぬ。かくしてコーヘンに於ける根源と非有の問題は、後にもやゝこれに觸るゝ機會のあらう如く、希臘哲學に於ける ἀρχή と μὴ ὄν もしくは ἄπειρον と πέρας との關係に於て原始的、むしろ範型的な問題を提供するものとも認められるでもあらう。

しかしてコーヘンの根源は彼に於ては終極の基本概念ではあるが、しかし自らに同一でありつゝ然もあらゆる具體的作用の源泉であることに於て見らるゝ如く、それは尙ほ內面的分析考察の對象となりうることは明かである。無限は單なる無限そのものとしては根源となることは出來ない。それは內にその無限を發展的統一に齎らす內在的能因、發展的契機がなければならぬ。コーヘンに於ては統一の原理と、統一せらるゝ素料を供する原理とは相異別なる二者ではなく、むしろ統一で素料を產み、素料は統一の作用によつて生ずるが、この具體化的統一、統一的具體化を意味する發展は、根源の有にして、もしくは根源の有に於て、發展の內面的要素を意味する非有の原理を有するに由らなければならぬ。しかもこは根源そのものに於ては an sich

に可能として、基礎として保有さるゝに止まる。コーヘンの根源はEtwasの根源であり、源源はEtwasとならねばならぬ。しかしてこの根源よりEtwasへの移行を可能ならしめ、Etwasより根源を發見せしめる迂路は卽ちNichtsであり、非有である。しかしてかゝるEtwasを產む媒介としての迂路、方途MethodeとしてのNichtsはもと、根源以外に於てあるものではなく、根源に對して外的なるものでもない。根源はan sichにNichtsを含むことによつてEtwasの根源たりえ、無限の有の發展の母胎となりうるのである。コーヘンが『非有は一般に眞に移行の途を開く』といひ、『根源は非有といふ媒介概念を必然とする』といふは一つにこの意味でなければならぬ。根源はかゝるNichts を含み、無限發展の可能を宿すものであつてこそ、眞にプラトーに於てしか解せらるゝ內面判斷διάλογοσによつてμέθοδοσを辿る無限相關の流れἄπειρονたる眞無限の位置と意義とをも有しうるのである。

根源は既に述べたる如く、思惟と實在の一致の根源であり、しかもあらゆる發展の基礎である限り、むしろ發展の半面的因由をなす自己支持としての自同性の根源でもある。このあらゆる發展を通して自らを支持する自同の根源としての根源の自同性は根源の實有性である。こは思惟そのものゝ自己支持と、あらゆる有のSelbigkeit

と、從つてまた思惟と有の事象性の因由となる。しかして根源の具體性は、その發展の根源としてこの實有性に對して非有性を有するものである。根源は吾等の分析的考察の容るゝ所に從へば、その同一性、自同性を意味する實有性と、發展の基礎、因由としての非有とを併せ含むものである。コーヘンに於ける基本概念たる根源はこの意味にて ὄντως と μή, ὄντως との掩合交流であり、まさにその故に自同性を有しつゝ發展性を有しうるのである。しかし乍ら根源そのものは、かゝる相對立する二元性の併立ではなく、むしろこの統一としての眞有 ὄντως ὄν こそその眞實相を示すものであらう。こは實に根源の根源を示す言葉である。コーヘンが思惟と實在の根柢に一の絶對を措くことに反對するは、それを思惟に對する外的のものとし、その絶對を靜止的至完のものと解せらるゝを恐るゝによるのであらう。むしろ永遠にして無限なる根源は、流動する根源に於て永遠にして無限なる絶對をもつものでなければならぬ。それは思惟そのものの基柢たるが故に、思惟自らの根源、の內的自覺に外ならず、根源の根源たるが故に永遠の生動發展の絶對基礎である。それは單純なる絶對ではなく、非有を含む具體的根源であり、この生動と發展の終極因由は、自ら眞有に於てあり且つ根源の有に對する所の非有である。かゝる眞有に於てあるものとしての非有こそは、

コーヘンがデモクリトスの非有に對して用ひた語をかるならば、正に眞の意味にての有を轉化せしめるEntwicklungsmomentである。非有はかくして根源に於ける、根源的發展の具體化の基礎である。しかし乍ら非有は根源に於て、究極の一致と無限の發展とを結合する媒介概念である。しかし乍ら非有は只媒介概念であり、發展のための方於的原理たるに止まり、決して獨立固有な內容ではない。けれどもそは意味なき無ではなく、Ursprungsetwasである。量的なるElementではなく根源の內在的なるMomentであり、發展の原理である。

かくいへば、かゝる發展の原理としての非有は直ちにヘラクライトスに於けるが如く、又エックハルトに於けるが如く、著しくはヘーゲルに於けるが如く、直ちに所謂矛盾として理解されるでもあらう。然り、コーヘンの根源に於て含まるゝ非有の能作と意義は、まさにヘーゲルに於ける矛盾と等しき意味上の位置と相似の能作をもつものである。しかしコーヘンはヘーゲルの所謂辨證法的形而上學と直ちに相一致するものではない。コーヘンはヘーゲルのたゞに反對を打倒すことに於て成立する辨證のDenkschemaを好まない。フィヒテの特に晩年の知識學にあらはれたる非實在Nichtsein の思想は、それが同時に連續と密接の關係を有する點よりは稍近似

する關係を有するものであらうが、しかし尙その否定の一義的意義の故に相異るものであらう。コーヘンは、後に稍詳しく觸るゝ機會のあらう如く、むしろライプニッツ、カントの綜合概念の眞精神を、より嚴密に科學的に發展せしめた體系の理念を以つて終始一貫しようとする。吾等がこゝに終極の基底として求めた眞有は、コーヘンにては究極の理念としての體系の概念に正に一致するでもあらう。コーヘンの理念は最高であればあるだけ、最深の基底に橫たはるHypothesisである。コーヘンの根源に於ける非有はまさに至高の理念たる體系に於て含まるゝ、否體系をして體系たらしむる內在的契機としての非有である。

ヘーゲルに於ても矛盾は實在そのものに內在する本性であつた樣に、非有は有に對して、有とともに眞有に內在するものである。否、非有こそ一般に眞有に於ける內在性を可能ならしめ、それを全たき意味に於て示すものである。凡そ內在とは一つが全たく異質的なる他の中に混在せるものではない。そは內在せらるゝものゝ根源の內面的必然を示すものであつて、根源が自らを保ちつゝ自ら働き、働くことによつて自らの內容を生みつゝVer-Ander卽ち他となり、自らの內容を他としてこれとの相關に於て尙ほ自らを保持することである。非有はかゝる內在の原理として、眞有

に於てあり、眞有をして開展し發展せしめその發展の過程を通して眞有の轉化としての有を可能ならしめ、あらゆる有と有の相開を可能ならしむるものである。眞有にan sichに內在して眞有そのものゝ動的發展の契機としての非有は、又、その眞有のあらゆる發展としての有の相關と轉化を可能ならしめ且つ相關せしめる基礎となる。非有はかくして發展の根源たるとともに相關の基礎である。コーヘンに於ける判斷とは思惟要素の分離と、分離に於ての保持とを意味するならば、しかして分離されたる有は眞有の轉化であり、かくて根源を一にする有と有の相關とは、轉化されたるものと根源との關係によつて可能なるものとせば、非有は正に分離と然して相關とを可能ならしむるものであり、コーヘンの全體系を通じて存する判斷の、從つて又あらゆる對象の構成を可能ならしむる範疇の內面的契機であり、その可能の基礎である。眞有そのものに於ては、なべて變化と創造なく、只すべてを攝してすべてを見るものであるが、非有は有に對し、有を發展に齎らす、自らそれを能作せしめつゝ能作の可能の基礎となるOperationsgrundである。

五

終極に於て思惟と有のIdentitaetたる根源は、特に根源の根源たる眞有は、上述の如く、

あらゆる發展の源泉としてan sichに內在的なる契機Operationsgrundとしての非有を具有するものであり、非有は根源に於ける具體的作用の基礎であるならば、そは直ちに又根源の一特質としての純粹活動的、作用的なることの可能を示すものである。コーヘンに於ては根源は純粹に活動的なるもの、作用的なるものとして示され、同一性としての根源はこの活動の相に於ての實在と思惟との相卽として、あらゆる有は思惟の根源より產出作用によつて生み出されたるものである。產出する作用そのものをおいて所產といふものはなく、『內容はすべて活動に止揚され』『生產の源泉とは畢竟活動といふことに外ならぬ。』しかしコーヘンがかく最究極のものとしてかかる根源的具體的なる作用を定立することは、そは旣に作用的für sichなるものである限り、尙ほ分析的考察の對象となり得るであらう。こゝにても尙ほ吾等は訊ねゝばならぬ。單純直接に定立さるゝ働きそのものは抑如何にして可能なるか。特にコーヘンに於ける如き、純粹なる、卽ち根源內に具體的なる作用そのものは如何にして可能なるか。活動的なるものは只活動的なるの故に根源的に然か措定さるゝのではなく、必ずやそれをして然かあらしむる內面的能因のあつて存せねばならぬ。しかしてかく根源に於ける作用をして作用たらしむる內面的要素は、吾等が先きに

考察したる如く能作の可能の基礎を供したる非有そのものでなければならぬ。非有は根源に於て an sich に內在的なる要素として具體的發展の基礎をなしたが、作用の相に於ける根源に於ては非有はまた fuer sich に aktuelles Moment として能作することによつて、この純粹作用そのものをも實的に可能ならしめるものである。

しかしこは單に余の臆見でないことは、コーヘンの非有を與へたる叙義に於て充分に確かめられうると思ふ。コーヘンに於てはその根源に於て非有を Operationsmittel として、ヒポテシスとしてのイデーによる無限判斷の迂路を通ほして、常に疑問として止まる Etwas をそれの根源に於て生產し規定するものであり、又一般に運動變化は有に對して非有を含むによるものであつた (L. 89, 112)。凡そ單なる有は嚴密に有そのものとしては能作の可能を有するものではない。働くものはその能作し、轉化する可能の場面とその內面的因由とを有しなければならぬ。作用し能作するものは必ずその作用の方途と手段とを有せなければならぬ。コーヘンに於てこの方途となり手段となるものは實に非有に外ならぬ。非有はかくして有を轉化せしめ、有を負載し、發展せしめる內面的作用因である。變化は一なるものを異なるものとして轉化し、作用とはこの根源を一にする異なるものゝ相關に於てなる。かく一を

負載して異たらしめる methodischer Trager に同時に又他を相關せしめ、相關に於てそのものゝ能作と發展を產む。相關とはすべて洵に非有の作用でなければならぬ。しかしてかゝる非有は決して有に對して外的異質的なるものではなく、有が變化可能的であり、作用的であることが、相關に於て共に眞有に於てあり、その相關的でありうる所以は本源的に非有と共にあることを示す。非有とは眞有に於て內在的なりしものが、有の相關的發展の變化に於て作用的 fuer sich となりしものに外ならぬ。しかし有は根源的に相關的作用的としてのみ有たることを得るものであるならば、有は本源的に非有と相關的にあらねばならぬ。卽ち眞有に於て非有と共にあらねばならぬ。あらゆる發展と能作のある所、そは既にその基礎に非有を有するによる。非有なき所活動なく、關係なく、從つて又有あることなし。

非有はかくして活動を二重の意味にて可能ならしめる。卽ちあらゆる作用の基礎、變化と運動の舞臺として(これは吾等が先きに考へた根源に於ける非有の內在的可能の要素であつた。)及び運動そのものゝ內面的契機としてである。卽ち一は an sich に於ける Operationsgrund としてゞあり、一は aktuell に Operationsmittel としてゞある。前者は一般に運動の可能的基礎として、後者は運動の作用的要素として、しかしてこは

ともに有に對する非有の能作に外ならぬ。非有のかゝる能作の見出されたることは哲學史上極めて古い。エレア派に於ける、感性的實在と眞の空虛のみの認定より脱して、超感性的實在と非有の眞意義とを發見することによつて初めてイデアリスム的轉向を遂げたヘラクライトスにあつては、空 κενόν 非有 μή, οὐ は運動を可能ならしむるものとして、存在、量、力のすべてを說明するヒポテシスとなされ、『運動のために場所を創造するもの』となされた。またヘーゲルの形而上學に於ては有は無と合して初めて轉化となりえたことであり、フィヒテの自我も自ら具體的なる作用として、あらゆる經驗的なるものゝ基礎となりえたのは根本的な非定立と非實在の能作あるによつたのである。コーヘンに於ても究極に於て定立されたる純粹具體作用としての根源は、非有を含むによつてその純粹活動と無限發展性とは可能であつたのである。特にコーヘンにては非有は單なる否定ではなく、無限否定によつて無限の發展を誘ふ、むしろ實現的な體系的綜合的限定作用であり、內に統一を含む創造的發展である。發展とはいよ〳〵豐富なる內容のいよ〳〵具體的なる統一であり、その發展的統一を可能ならしむる作用化の原理は卽ち又同時にいよ〳〵深く自らの支持に歸り自らの自同に純粹なる作用である。非有の能作とは非有そのもの

ゝ眞有に於ける根源性の自覺である。

普通いはるゝ如く、Substratとしての實體より、有限的存在への轉化は、實體自らの否定もしくは限定によるとなされる。もしこの否定の作用が實體そのものに內在的なるものであるとするならば、この作用はaktuellな非有の一作用を現はすものであらう。例へばこれを典型的なスピノザに於て見るも、スピノザの無限絕對の實體が如何にして二屬性となつて有限悟性に適合的となるか。彼の如く屬性は實體に於て具する本質ではなく、單に人間悟性の見方に過ぎずとするも、人の悟性は又、彼によれば、實體以外のものたることを得ない。果して然らば、自ら屬性を有して然もそれが二屬性となつて人間悟性に適合的となる可能は實體に於て存せなければならぬ。惟ふに屬性は彼の言へる如くnegatioであり、determinatioであるが、しかも實體たるens absolute indeterimnatumはdeterimnatumを有するものでなければならぬ。かくして彼に於ける絕對實體が充全に具體無限たる理由の示さるゝことなく、充全なる媒介能因を無限に於て含むことなくば、彼の唯一實體より樣態の多を正當に演繹することは不可能である。コーヘンに於ける根源に內在的なる非有は、根源よりの發展に於ける媒介概念であり、その有限化現實化を行はしむるものなることは疑ひがない。この

意味にて非有は自ら無限に存して無限を有限たらしめ、有限と無限を媒介する作用である。しかしこの非有の限定は必ずしも否定を意味するものではない。アリストテレスは否定と並んで奪去Beraubungを立てゝnon Aを奪去の意味にて生かし、潜勢を意味せしめた。即ち可能上の實在たるものは奪去の上では非實在である。未だ現實性に達せざるものは現實性を奪はれてゐるのである。從つてそは現實たらんがためにはこの奪去に於ける非實在の現實化によつてnonが〔ξ〕として作用しなければならぬ。コーヘンの非有の〔ξ〕は固より否定ではあるが、實體的絶體的否定を意味するのではなく、判斷の作用に關する無限判斷的否定である。即ち〔ξ〕とは差別されたる〔ξ〕であり、そは實現的否定即ち無限判斷的限定である。コーヘンのイデーがプラトーのそれとともに、ヒポテシスを意味し、無限判斷として現實にまで基礎づけつゝ開展するのは、一つに無限否定としての非有の能作あるによる。故に非有は等しく否定でありつゝそは單なる消極限定ではなく、無限判斷による無限の現實規定と體系的發展の内面作用的要素である。

六

吾等は既にコーヘンに於ける根本概念たる根源をその能作の上より分析して、そ

は an sich に內在的なる非有を含むことによつて、又 fuer sich には作用的要素としての非有を含むことによつて、あらゆる發展の基礎となり、又發展の作用を可能ならしめらるゝことを見た。かくの如くして非有は根源に對して作用化の要素もしくは原理として特質づくることを得るであらう。吾等は更に根源の發展に於ける非有の現實化の能作に就て考察を進めなければならぬ。蓋し全たき意味にての根源の具體性は作用性と同時に現實的事象性を意味しなければならぬからである。

吾等は先きに根源に關して第三の問題を導き出した際にも述べた如く、コーヘンに於ける根源は純粹に質的なるものであり、これが思惟の究極基礎であり第一制約である。かく根源を質的なるものと認めて、毫も實體的、物的なるものとせざることは彼の全體系に無碍の流動性と無限の動的發展性とを與へた根本特質である。しかしてかゝる質的なる規定は只對象生產のための制約であり、純粹質的なるものは現實の基礎たるものであつた。しかるに現實の有とは有限的、量的のものであり、感覺的內容に結合する個體構成的なるものであり、意識に於ける時空の判斷(もしくは範疇)に適合せるものである。然らばかゝる基礎的なる純粹質的なるものより、その量化、現實化、個體化は如何にして演繹されるであらうか。個體化の能作に關係する

感覺及び時空は如何に說明さるべきか。私はこの量化、現實化、個體化の內面的要素と考へらるべき Materie と非有とを聯關せしめて、コーヘンの體系を通じて意味する所、もしくは意味すべかりし所を追究して見たいと思ふ。

コーヘンに於ける質的無限を意味する根源は、しかして原本的に純粹活動的として定立さるゝ根源は、まさに無限小の無限連續的實在性である。かゝる質的なるものより量的なるものへの轉化は、コーヘンの體系に於ては、質に關する純粹思惟の判斷より量に關する數學的思惟卽ち實在性數多性、總體性の判斷への移行に關する。彼に於ける實在性たる『統一的單位は思惟の根源から有として產出せられる』微分的無限實在性であり、しかしてかゝる實在性の範疇がその產出作用によつて無限の系列をなす數多性 Mehrheit となるとき、こゝには自らより異として差別する分離の作用がなければならぬ。『差別するとは das Andere として分離することであるが、數はその根源に於て、自らに於て無限小の無限の Ordnungen を保有し、その絕對的統一を超ゆる要素をもつ。こゝに數多性の生ずる根本作用 Grundoperationen の必然性がある。(I, 148)この分離とは豫め與へられたる諸要素の Absonderung でなく、分離せらるゝ諸要素はこの作用によつて產み出さるゝといふ產出、卽ち Ersonderung である。かゝる So

nderung によつて Hingzufuegungとなるといふ Methodik によつてのみ、あらゆる思惟内容は産み出される。かゝる附加作用が純粋分離であり、生産的分離である。數多性とはかゝる分離を産出し固定するものであり、かゝる生産的分離は質的無限より數量的範疇たる數多性を生ずる根本機能である。一般にコーヘンにては Sein は變化を要求し、自ら純粋に産出さるべき Ver-Ander を必然に含むものである。(L. 161, 219) しかしてかかる分離はまた實在性がその根源に於て享くる自らの自同性に於て、『すべての要素が自らを保つと同時に Gegenhal ung の力をもつ自同性に於て分離は最も明瞭となるのである』(L. 108)。かくの如くしてコーヘンにては異として分離する事も、またその分離の反面としての自同性も、ともに根源自らに於て含まれ、根源自らの要素でなければならぬ。かく自らの自同と發展の要求の故に、發展のための相關と相關のための分離とは具體的根源の根本特質である。根源の思惟は自らの價値の向上と保持のために分離を要求し、分離による數多性の表現に於て質的なるものゝ量化の基礎がある。Der allgemeine Wert des Denkens münzt sich durchgängig in besonderen Werten aus. Sosoll die Qualitaet zur Quantitaet führen. (L. 127) 質は自らを維持し發展するには量を要求するのである。しかして、かゝる根源に於ける分離と自同的なるものゝ相關

とによる量化を可能ならしむるものは根源の以外にあることを許されない。コーヘンによれば有限的Etwasを根源より生産せしめ成立せしめるものはNichtsであり非有であつた。從つてこゝに質的根源より量的Etwasを導き且つ可能ならしむるものは非有なることは言ふ迄もない。彼の明かに言へる如く、分離は非有の運用概念の働きによるものである。(L. 93) 彼に於ける質が量への傾向を含み、根源より分離によつて數多性が生産され、可能ならしめられるのは一つに根源に於て存する非有の能作によるのである。かくて非有は量化の原理である。コーヘンに於ける純粹質の範疇による思惟法則の判斷より、量的範疇たる數學の判斷に進みうる可能と必然とはその根源に於て含む非有の特質と能作に因由する。

抑コーヘンに於ける質とは嚴密に如何なるものを意味するであらうか。彼によれば、有限なる曲線は、純粹に質的なる見方の下には Tangenten-Punkte の全體であり、點は只個々に方向を含む能產點である。純粹質とはかゝる有限の根柢としての、只性質のみを含む基礎である。そは數學に於ける眞の實數の極限要素であり、その上に種々なる有限數系列を生ぜしめうるものである。この點はカントルの所謂極限要素に相當する思惟の無限の過程の理想であり、同時に思惟の內容發展の創造的根源

たるものである。そはxを生ずるdxであり、有限を生ずる無限の基礎である。コーヘンの言葉をかれば、das Reale であつて、あらゆる相對的なるものゝ基礎たるものである。そして又そは、それ自らに方向もしくは性質をもち、それ〴〵特殊への能力、意識に於ける内容としてはその對象的規定に於いて一の要求を具してゐる意味にてGradをもつ。そはかくGradをもち且つ常に全體として存する點よりカントの所謂内包量である。こゝに所謂Gradとは自然科學的數量的差異ではなく、質的差異であり、微分的にたとふれば、連續に於ける微分係數をもつ發展的なる能作である。コーヘンがカントに於ける知覺豫料の原理より深き意味を見出して感覺とは das Reale の要求を示す指標であると解したのは、一の特殊なる質的統一としての直觀に於ける基礎たる内包量の能作を見たのである。しかしてかゝる内包量は直觀に於て個々に比較しうる量Vergleichungsgrösse としての外延量となる。(Vgl. Kants Theorie der Erfahrung. 4 Aufl. 1925. S. 382 f) コーヘンによれば内包量の和は自らも亦内包量ではあるが、しかしそは、むしろ適當なる言葉を以てするならば、『有限的なるものゝ產出價値』であり、產出可能の基礎を意味するものである。かゝる全體的、無限的、質的なるべきものが、既にGradをもつ内包量として特質づけられ、unendliche Kleine としてこの意味に

て既に量的なるは、それ自身純粋に質的無限的なるものも、常に外延量的、有限的、量的なるものへの方向を有する特質として外延的、有限的、量的なるものとの關係に於て、もしくは限界に於て考へらるゝによるのである。dx は少くもその表現に於てはゞをはなれて考へ得ない。カントに於ける知覺豫料が Grad をもつとは質的な内包量がそれ自ら量化への傾向を有することを意味するに外ならぬ。コーヘンにて内包量を外延量の根源と考へる思想は、ライプニッツの Imo extentione prius の語に言ひ表はされてゐるのであるが、コーヘンはこれを發展して、外延的有限量の創造的根源としての内包量たる微分の意味を力説したのである。（田邊博士、數理哲學研究、一七六頁以下參照）

かく純粋に質的なる根源に於ても、その質的無限は内包量となり外延量となる可能と必然とを具するコーヘンの思惟法にては、しかし純粋抽象の世界は、形式論理學のそれの如く、その存立の理由を許されない。彼に於ける純粋の概念そのものは、既にあくまでも具體的なる根源を意味した。彼の實在性とは既にあらゆる發展の可能を作用的に含む、有限の根柢としての無限の Realen である。純粋思惟の世界とは單なる抽象知の構成ではなく、有限に對してその根源を規定する極限、微分的實在の

内面的相關の法則性に外ならぬ。凡そ三角形一般と言ふ如きも、そは單なる抽象として成立するのではなく、そが論理的に價値あるものとして思惟せらるゝ限り、必ず鋭角、直角、鈍角の三角形となり得、現實のあらゆる三角形として充實具現されうる意味を有するものでなければならぬ。少くも現實關係的であり、對象の世界、意味の實在は現實への內在的具現的指向を有せねばならぬ。コーヘンによれば、プラトーの純粹理性思惟 νόησις にはイデアの思惟 ἐπιστήμη と數學的思惟 διάνοια とあり、後者は幾何學的圖形の如き可視的形態 εἴδη について思惟し、三角形自體、圓自體の如き ἀεί, ὄν, ὄντα を明證的に見る ἰδεῖν ものであり、かくして數學的思惟所產の形象はイデア及び感性的事物と相並んでその中間に位する特殊の地位を與へられた。(Platos Ideenleh. u. d Mathem. 6—18, 35) かくして數學的思惟は知覺に於てイデアの思惟を覺び起すもの ἐρεθιστικόν であり、感性と思惟との媒介者であり知覺はこれによつて οὐσία の直觀へ導かれうるのであつた。この意味にて數學的思惟樣式は非有概念的特質を有するものであり、(ob. cit. 18, 7) 數學的思惟は本質と現實の相關媒介に於てその存在理由を有し、あくまでもそれ自身に具體的なるものである。しかしてこのことは又『思惟は所謂純

粹數學にのみ止まるべきではなく、物理學への移行は思惟のより本質的な行き途である』(L. 307) ことも自らに導かれうることである。コーヘンの質の範疇は自ら數學の範疇に、數學の範疇は自ら數學的自然科學の範疇に發展すべきものであり、しかしてこれらを一貫して根源の判斷がその基底となり、その具體化の過程は根源に內在する非有が、いよ〳〵作用的となり、實現的となる過程に外ならぬ。

かく範疇のあらゆる段階を通しての具體化は非有の能作によるのであるが、これが現實性にまでの具體化に於ては時間及び空間が必然に考慮せらるべき關係を有する。コーヘンはカントのSchematismusは彼が範疇そのものゝみにてはRealisierungに不充分であることを認めた證據であるとしたが、また範疇のあらゆるRealisierungは時間に於て行はれねばならぬとし、從つて時間を實在性のすべての流水のBettとしたことに彼のIdealismusの深き意味を認めた。しかしてコーヘンにてはすべて系列はその基底に『生產的時間』を有するにより、この時間範疇によつて統一的實在性の生產的繼續、段階系列としての數多性が生じ、『數多性が生ずることによつて內容が生ずる』のである。『時間範疇なくば數多性なく、從つて又內容なし』。『內容を生み出だすといふ目的に役立つものは時間と數とである』。數は內容を產む。數は客觀

の眞の源泉となる。數多性の遂行する產出作用そのものに於て、根源の生產したる以後の最初の內容の erster Ansatz が開展する。(L. 156—167) 『Partikularitaet は純粹思惟の遂行であり、數多性はその範疇である。』しかして『個別性は個々に獨立せるものではなく、多の一として生產せらるべき內容である』(L. 171f) しかし乍らかゝる時間は尙ほ未だ思惟の內的體驗性を脫せざるに對し、思惟の產出性はこれを外的なる相關となして初めて實在の思惟、自然の思惟となる。時間の數多性に於けると同樣、空間は總體性の判斷に於て範疇として働らく。時間の範疇に於て產出されたる數多性の統一單位を Beisammen, zusammen として內容を形成するのは空間範疇である。卽ち無限の Zusammenschluss に於ける無限の要素を空間の總體に合一する。かく Beisammen の保存が卽ち外的なる所以であり、Beisammen の產出が外的の產出であり、かくして外的なるものの眞の內容を確立する空間に於て、內的の概念としての意識の概念を擴張するといふよりも、むしろ超越するのである。(L. 196) かくの如くにして『時空が融合する運動固有の働き』そのものに於ては既にかくの如き內面的要素の數多性的產出と、外的共在的總體的形成の能作が含まれ且つ作用してゐるのである。

コーヘンのこの內容を產む數の根柢にある時間と、形態的客觀を產む空間の思想

には、希臘哲學に於ける原始的な理性論的思想が伏在してゐることは明かである。古きピタゴラス學派にては空 κενὸν は音階の位差 διάστημα や、形態を產む奇數と考へられたる(矩形の二邊の平方の差なる)曲尺形間隙 γνώμων であり、そは相接續するものを分割し χωρισμός 差別する διάστασις と同時に又形態的なるものを產み出す原理となされ、自ら又限定作用 πέρανσις として ἄπειρον と互ひに相關し、この相關に於て有は充分なる開展の可能を有した。卽ち πέρας や διαστήματα は否定的原理としての空であり、非有であり、連續と統一に必然のものとして、感性的存在のために考へられたるものであり、無限と現實とを媒介する方法的概念であつた。コーヘンの radikaler Rationalismus はピタゴラスとともに非有を媒介的、方法的に使驅することによつて現實を產む具體的なるものであり、時空はこの生產的限定の範疇となつて具體化、實現化に作用するものであつた。

コーヘンにては感覺の問題はまたこの實現的過程の範疇に關聯して起るものである。彼にては感覺は吃る要求であり、これに發音を與へ dies としての Dasein を與へるものは個別の範疇である。個別の問題は數量 Grösse を要求し、現實性は數量によつて個別を表はす。數と空間との可合一、デカルトの所謂 Raum-zahl が卽ち數量であ

り、こは空間の總體性が數多性としての數に對して自ら制限し、個別として妥當せしめるのである。(L. 480) 數量にして初めて數多性による、卽ち有限數による空間の制限を要求す。かくして量は個體を嚴密に規定すべき課題をもつ。この嚴密性は、クザヌスがしか名づけたPraecisioである。かくて量は一の批評的、方法的範疇であり、量は個別に於て明瞭となる。

しかしかゝる量による個別化は意識の範疇に於て可能である。コーヘンに於ては感覺は意識の範疇に於て初めて現はれるものであつた。コーヘンによれば、意識は可能性に於ける批評的方法的範疇である。凡そ哲學の全領域に亙つて如何なる問題の解決も意識を豫想せざるものはない。古きOntologieにては可能性は有の規定の根柢であつたが、今やその代りに意識が現はれる。かくしてコーヘンの純粹意識は自らの內容とその內容の體系を產出し、あらゆる有の規定の基礎をなすものである。(L. 42 of)意識の判斷は可能性の判斷であり、根柢に於て存するヒポテシスの判斷である。意識に於て微分的實在は力の原理としてのエネルギーによつて內包的實在となり、終に物質に向ふ。かくして意識から物質が產み出される。(L. 449 f) しかして吾等が先きに述べた如く、純粹質的なるものに於てfuer sichに作用する內面的要

素、非有によつて內包量は外延量となるならば、非有は同時に有の規定の基礎としての意識に於ての作用過程を示すものであり、從つて有の規定に於ける fuer sich なる意識の作用に實現せしめる內面的要素は非有であり、非有はコーヘンに於ける根源よりの發展過程に於ける意識の側を示し、彼のいはゆる客觀的論理學の主觀的要素をその實有論に於て現はすものとも言ひうるであらう。非有の能作は主觀的には卽ち意識である。

かくして彼にては又感覺は純粹意識の領域を離るゝものではなく、感覺を思惟に對して獨立せるものと考ふるは一つの惡しき先入見である。しかし彼はかく感覺の獨立性には反對するも感覺の要求は承認し、感覺が意識の一種として考へらるゝ限り、それは純粹思惟の一要求を代表し、感覺は只意識性の最後の表出として妥當し現實性の判斷によつて初めて組成さるべき要求を表出するものである。(L. 427, 493) 思惟は決して感覺によつて完補されるものではなく、只 der zum Anspruch berufene Index として思惟によつて初めて現實性の範疇構成に齎らさるゝものである。しかしてかくの如き意味に於て感覺は思惟に對して質料的條件としての Materie の意義をもつものである。意識の判斷に於て現實性が成立するとは意識に於て要求として現

はれたる感覺によつて個別對象が形成されることである。しかしてFormがMatérieを包むことによつて個々の特殊が形成されるといふことは、Matérieが普遍のFormを載せて根源的普遍を發展し具象化し個別化することである。MatérieはFormに包まるゝ單なる材料ではなく、Formを實現せしめる內面的要素である。かくの如きものとしてのMatérieは純粹に質的活動的なるものを、そのもの自らの內面に於て量化し、具體化し、現實化し、個別對象化し、卽ち個體化するものである。

カントに於ては現實性は外的なる感覺との連絡の上に基づけられたが、コーヘンはこの質料的條件を上述の如く根源的產出によつて純粹に基礎づけた。コーヘンは可能性の範疇に於ては意識の概念を究明し、『意識の概念の內に可能性のあらゆる皺が折りこめられてゐる』とし、現實性の範疇はこの基礎の上に感覺の考察を以て進んだ。彼によれば現實性は純粹思惟にとつて最も困難なる障礙をなしてゐる。人は現實性が感覺の內に藏匿されて居り、又感覺に於てのみ與へられると信じてゐる。しかし感覺は現實性の判斷の目指す所のものを盡く告知し指示するものではなく、一切の現實性は感覺に基くとすることは出來ない。しかして彼は現實性を個體の範疇に還元した。可能性の判斷に於けるMassと等しく、現實性に於てはMassは

Strecke となり、Grösse となり、これによつて個體を從へ且つ規定する。こは產出的方法に對して一の運用概念をなし、個體の規定のために諸々の產出的方法が完全に遂行され、從來のすべての範疇に代つて今や個體に凝集し、從來のすべての範疇は個體の問題に對して根源を異にする異質的素料としてではなく、只 Gröss の運用概念によつてあらゆる範疇の方法的產出を通して終に現實性の判斷に至つて個體をその方法的意味に於て基礎づけ確立することが初めて可能となつた。

かくして單に感覺としてではなく、純粹思惟と純粹意識とに由てのみ個體の要求は形成され滿足される。個體は感覺の吃る要求に對して發語を與へる範疇である。個體のみが Dasein として認められ、Existenz を現はし得る。かゝる各の個體を成素として含む普遍性は卽ち必然性であり、總體性は Zusammenfassung のみを意圖するが、必然性は各個體を目指す。この意味にて『個體こそは眞の普遍に導く』のである。この個體の問題に至つて自然對象の產出的構成に關する限り、認識の問題は一先づ終結し、根源より次第に範疇の段階を追つて發展し來つた客觀化の過程を通しての非有の能作は作用化の原理として、且つ現實化の原理として同時に個別化、個體化の原理であつた。しかしてこの非有の個別化的能作は反面その根源に於ける自同性の作

用化でもある。コーヘンの Identitaet は一面思惟と實在の終極的同一極源を意味すると同時に、その根源的なるものゝ分化發展の段階に於ては、そのあらゆる實在性の自同卽ち個々の要素の自己支持を意味する。この自同性は卽ち個體化の原理の基礎であり、畢竟根源の同一性が非有による分離と相關を通して作用的となつたものに外ならぬ。（未完）